八幡川と氾濫

年	氾濫の内容
1755年（宝暦5年）	魚切山が崩れ、八幡川の流れが現在の川筋となりました。以前流れていたところは、古川と呼ばれています。
1771年（明和8年）7月9日	下河内野地谷が大洪水となりました。このとき死亡した人の冥福を祈って小林地蔵が建立されました。
1829年（文政12年）5月24日	大地震により山抜け（山腹の土砂が崩れ落ちること）が起こりました。
1850年（嘉永3年）8月7日	暴風雨によりこの年は不作となりました。それで収穫米の三分が免租となりました。
1872年（明治5年）	大洪水となりましたが、幸いにも人や家畜に被害はなかったようです。
1928年（昭和3年）6月24日	大洪水により上河内中郷や下河内で家屋の流失や死者が出ました。
1945年（昭和20年）9月20日	仏峠の東側頂上付近の山抜けにより、山津波が発生し、家屋の流失や死者4名が出ました。
1951年（昭和26年）10月14日	ルース台風による集中豪雨により、田畑の流失、橋の流失など甚大な被害を受け死者3名・行方不明者1名が出ました。
1999年（平成11年）6月29日	梅雨前線による集中豪雨により、田畑の流失など甚大な被害を受け河内地区は死者10名が出ました。

ルース台風の被害

6.29 災害の残る荒谷川

6.29 災害の残る荒谷地区

八幡川の往来

都志見往来に導かれて

「都志見往来日記」 1797年（寛政9年）に広島藩士で画家でもあった岡崎山（オカミンザン）は、芸北山県郡の都志見（ツシミ）にある峠ケ瀧を見物する旅に出ました。彼は道中記として日記をしたため、史跡や風物に独自の解釈を著しました。さらに「都志見往来諸勝図」に風景をつぶさに描いています。

[河内地区の部分引用]

「保井田を出て寺田をすぎ、下河内へ移る所、川端に番屋三軒あり。川に石き吉橋あり、此処より山に登る。道次第に嶮にして、左右切り岸、高さこと三、四間ばかり、其の間を通る。此の辺所々家あり、半道ほど登りて左山高く、右の方谷深し、すべし夏の頃水内へ入浴の人夜中あやまりて此所より落つる事凡そ十四、五間ばかり、されども命に死に及ばず、水内へ行き入浴せしと所の者いえり。猶　登りて、左の方森の内に社あり、此所を宮の原と云う、それより漸やく登りて河内峠に至る。しばらく足休して眺るに、北に大山峨々として、半腹に細き道路あり。下に谷川蓼の如くにめぐれり。上より見れば此の川所々源ありて、蓼のごとくに分る。此の峠より西北の方へ斜に下りて谷に入る、左山高く右に流れを見て行く頃に、樹木茂りいんいんとして冷やかなり。」

以下略

「都志見往来諸勝図」宮島岩

河内峠

河内峠

岡嶂山著「都志見往来日記」や「都志見往来諸勝図」に紹介された峠道で、下河内の白川地区と川坂地区を結んでいます。南面は荒谷川の発源地で、北面は八幡川本流への急坂となっています。江戸時代以来峠には茶屋が置かれ、峠の清水も湧き多くの車馬や旅人が通っていました。明治に入ると県道となりましたが、やがて八幡川沿いに付替えられ動脈の機能は無くなりました。

「都志見往来諸勝図」河内峠

仏峠

仏峠

上小深川地区の野登呂の野登呂川から、窓ヶ山から向山に至る尾根に登り、安佐南区伴地区に至る古い道があります。峠道を"たお"と言い、峠の傍らに小さな石仏が安置されました。その後「ほとけがたお」と言われ車馬が通りましたが、水害等で現在は通行困難となっています。

仏峠の位置図

県道の付け替え工事

河内から砂谷へ抜ける道は、八幡川沿いの現在の県道ではなく、荒谷川沿いを通っていました。川沿いの山間部分は大変険しい行程で、物資の輸送にも困難を極めていました。1901年（明治34年）11月から付け替え工事に着工し、1904年（明治37年）3月に完成しました。この新道改修の碑が、広島市農協河内支店南側に建立されています。

写真左　新道改修の碑

道標

道標は、日本各地に残っていますが、旅をする時の重要な案内標識です。現在は車での移動が主体となり、昔のような石で作られることはありません。河内地区にも八幡との村境に、昔は境界標がありましたが現在はありません。上河内地区古川には、今も道標が残っています。昔この細い道を多くの人々が魚切や野登呂方面へ往来したものと思われます。

上河内地区古川に残る道標
（「右　砂谷」と刻まれている）

八幡と河内の村境の標石（現在は、石内の収蔵庫に保存）

白川と砂谷の標石